第２３期　国立市社会教育委員の会（第１回臨時会）会議要旨

令和３年３月８日（月）

［参加者］倉持、丹間、苫米地、石居、富田、佐々木、根岸、江角、砂押

［事務局］雨宮、土方、長谷川

倉持議長　それでは皆様、本日はお忙しい中お集まりいただきまして、ありがとうございます。

前回、定例会議では審議の時間が間に合わないということで、臨時会ということで本日は開催させていただきます。よろしくお願いいたします。

では、まず事務局より配付資料の確認をお願いしたいと思います。

事務局　事務局でございます。本日もよろしくお願いいたします。

配付資料の確認をいたします。まず、次第と書かれているものが一番上に載っておりまして、次第が１枚ございます。その下に、資料１－１が意見書のかがみ文、資料１－２が議長、副議長の修正案となってございます。

その他、もう一つの山に、毎回お配りしている「公民館だより」「図書室月報」、図書館の「いんふぉめーしょん」でございます。それから一番下、「とうきょうの地域教育」という冊子をお配りしておりますので、御覧いただければと思います。

配付資料に漏れ等がありましたら、おっしゃっていただければと思います。よろしいでしょうか。

配付資料の説明は以上でございます。

それと前回、第２２回の議事録は現在作成中でございますので、３月下旬に開催予定の第２３回定例会で確認させていただければと思います。

説明は以上でございます。

倉持議長　ありがとうございました。

それでは、議題に入りたいと思います。適切な事業評価方法の検討についてということで、前回の第２２回の会議では、意見書案についてまとめるための審議を行いました。本日は、前回の審議でいただいた委員の皆さんの御意見を踏まえて、議長、副議長とで作成した修正案を基に、審議を進めていきたいと思います。

資料１－１、１－２について、事務局より説明をお願いします。

事務局　事務局でございます。お配りしている資料１－１、また１－２を御覧ください。こちらの資料につきましては、事前に委員さんにお配りしたものと同じものになってございます。

資料１－１につきましては、前回の会議でもお配りしておりますけれども、意見書案のかがみとなっていまして、こちらを最終的に教育委員会教育長宛てに提出する文案となってございます。

続きまして資料１－２につきましては、先ほど議長からも御説明がありましたとおり、第２２回までにありましたいろいろな案、それから第２２回での御意見を踏まえまして、議長、副議長の修正案という形でまとめたものでございます。本日、主にはこの資料１－２の内容について、議論をいただければと思います。

事務局からの説明は以上でございます。

倉持議長　ありがとうございました。

今、事務局からの説明にもあったように、前回いただいた意見を踏まえて、議長、副議長で構成を見直しつつ、形式も箇条書風にして、なるべく１つの内容を箇条書にという形に。それから構成を見直したことに伴い、情報も少し整理して、重複しているところはなるべく１か所にまとめるような形で整理し直しました。

事前送付といいましても、本当に数日しか見ていただく日にちがなかったと思うんですけれども、本日いろいろ御意見をいただいて、次回の本会議でもう一度検討し、４月には意見書として確定、取りまとめていきたいと思っております。

では、資料１－２の１ページ目から見ていきたいと思います。

まず「はじめに」の部分は、ほとんどそのままになっていますけれども、２段落目の「ここでは」というところの括弧書きや、以降、１番、２番、３番という、大きな柱となる項目はこの３点ということで、頭出しをしているということです。

内容的には、まず大きな１番は、適切な事業評価の考え方についてということで、（１）事業評価のあり方について、（２）評価の構造について、（３）単年度評価について、まとめています。

まず、この１番から見ていきたいと思います。

（１）事業評価のあり方については、元の文章を箇条書にして、少し文言の整理などを行っています。テーマが幾つかがありますが、１つ目のポツで、評価の対象は市民の学習活動そのものではないということを明示しています。２つ目のポツは、評価の目的を述べた部分。３つ目のポツは、生涯学習・社会教育の主役は学習者であるということで、事業評価の観点をその観点から述べたもの。４つ目のポツは、中長期的な視点から見ることも必要ですよということで、スパンを示したみたいなことですね。最後、５つ目のポツは、評価の活用についてになります。

まず、１の（１）について、どこか内容的なことでも、表現的なもの、語句の面とか細かいことも含めて、お気づきのところがありましたらコメントをいただければと思います。いかがでしょうか。

ここはそんなに大きく変えていないのですが、後で戻っても大丈夫なので、ひとまず進んで大丈夫ですか。

では、１の（２）評価の構造についてです。ここは４つのポツがあります。１つ目は、単年度評価、中間評価、最終評価の関係性を書いている部分です。単年度評価の先に中間、中間評価の先に最終ということで、一つ一つの事業の点検も大事だけれども、生涯学習や社会教育の特性を踏まえて、中長期的な観点で評価することも必要だと。両方、なぜ必要なのかということを書いた部分になります。

めくっていただいて２ページ目、最初のポツも前回とそれほど変わっていないと思いますが、定性と定量それぞれの特徴を生かして、両面から行うということを言っています。

３つ目は、社会教育委員の関わりについてまとめた部分です。事業評価の基本は行政による自己評価であるがということですね。前回の御意見を踏まえて、「社会教育委員の会が、行政が実施した自己評価と改善のプロセスや評価方法について検証し、中間評価や最終評価に意見を述べ、次期の生涯学習振興・推進計画の立案に生かすことが必要である」というふうにしています。強いとか弱いとかありましたら、御意見を下さい。

最後の４つ目は、評価結果の公表についてです。分かりづらいかもしれないですけれど、「閲覧可能な方法で公表し、公表していることを情報発信してほ

しい」というのは、前回の御意見で公表するのも大事だけれど、公表しているということをちゃんと周知してほしいという御意見があったように思ったので、こういう書き方にしてみました。分かりづらいとか、変えたいとかあれば、おっしゃってください。
　以上、１の（２）のところで、何か御意見はございますでしょうか。

砂押委員　てにをはなんですが、１の（２）の１つ目のポツで、「単年度の事業評価の積み重ねの先に中間評価があり、その積み重ねの先に」って、「積み重ねの先」がダブルで出てきているのですけど、中間評価、最終評価があるというふうに並べちゃっても、さらっといくのかなと思いました。丁寧に言えばこういう形になるんでしょうけど、何かダブっているなと思ったのが１点です。

倉持議長　ありがとうございます。

砂押委員　ちょっとよく分からなかったので質問でもあるのですが、２ページの２つ目のポツ、基本は行政による自己評価であるが、社会教育委員の会が自己評価と改善のプロセスや評価方法について検証し、意見を述べると書いてあります。中間評価及び最終評価でも意見を述べ、推進計画の立案に生かすことが必要であるということが書かれていますが。
　となると、生涯学習振興・推進計画の評価をするのは、自己評価、いわゆる実施者である行政と、もちろん参加者によるいろいろな評価と、それと、この会であるということなんでしょうか。何となく私のイメージだと、我々がそういうふさわしい外部委員を見つけてきて、その人にこれを見てもらうのかなと私は思っていたのですけど、そうではないわけですよね。
　教育委員会の活動点検評価報告書とか、行政評価の報告書とか、ほかのところでも、こういう活動を評価するときはやはりいろいろな先生が出てきて、いろいろな意見を述べられているので、この会がいいのかどうなのかなと思った次第です。どこかほかの先生にお任せしたほうがいいのか、もしくは行政評価の先生であったり、教育委員会の活動点検評価報告書で意見を述べている先生が既におられますので、その先生にこれをお任せしたほうがいいのかなとか。
　そこが、私としてはまだ、何がいいのかよく分かっていなかったので、そうなんですねという確認です。
　あと３つ目が、同じところで、「次期の生涯学習振興・推進計画の立案に生かす」という書き方で、これはこれでいいと思うのですが、どこかでＰＤＣＡサイクルをちゃんと重視して、回していくんだとわかるような、ＰＤＣＡという言葉はどこかに入れた方がいいかなと感じました。最初から最後まで入っていないので、どこかに入れるとしたらここら辺かなと思って。その言葉はあったほうがいいのかなと思った次第です。
　以上、３点ほど。すみません。

倉持議長　砂押委員、ありがとうございます。最初に言っていただいた「積み重ね」が２回出てくるのは、私もちょっと、最終チェックをしているときに気になっていて。「単年度の事業評価の積み重ねの先に中間評価があり、その先に最終評価がある」、そういう言い方でもいいですかね。分かったことなので。

砂押委員　ええ。

倉持議長　じゃあ、２つ目の「積み重ねの」を削除して。

苫米地委員　苫米地です。先ほど砂押委員が言ったのは、「中間評価・最終評価がある」というような感じですね。

砂押委員　並べても、まあ、意味はさらっと通じるかなと思ったんですけどね。

倉持議長　なるほど。「単年度の事業評価の積み重ねの先に中間評価・最終評価がある」と。それでもつながりますね。じゃあ、そうしましょうか。ありがとうございます。

　２つ目の御意見についてですけれど、私の理解では、外部委員に頼む、頼まないについて、ここでは意見を出していない。すなわち外部委員に評価を打診、依頼する、しないも含めて、評価方法だと思うんですけれども、社会教育委員の会としては何をするのかをここに書いたつもりなので、社会教育委員が外部委員にお願いするということはないかなと。外部委員にする、しないも含めて、自己点検をどうするかということが行政の責務であり、それに対して、社会教育委員として、そのプロセスとか方法について検証したり、意見を述べたりすることができるし、次の計画立案に対して、その意見、評価を踏まえて意見をすることができると。

　今、私たちがやっている権限は意見を出すことができるということなので、そこを逸脱しない範囲で書いたつもりなんですが。一応そういう理解なので、だから、あえてここで評価の在り方として、識者とか外部委員で組織をつくったほうがいいとかいうこともちろんできるんですけど、そうするもしないも、今のところは特に触れておらず、社会教育委員の役割のほうにちょっと引きつけて書いた文章のつもりだったんですけれど。その辺は、ちょっとまた御意見をいただければと思います。

　どうぞ、富田委員。

富田委員　この社会教育委員の会の役割について、この程度に現段階でしておいていいんじゃないかと、私は思います。

　その前に「事業評価の基本は行政による自己評価である」と書いてあって、実際に中間報告、最終報告をやるとき、行政側の立案というか、どうやるかということを行政側で考えてくださるというか、しなきゃ進まないと思うんです。同時に現場で、例えば基本方針に加えて現場ごとの何か、目玉の重点事業について出すとか、自分のところの方針に沿って出すとか、現場でもどうやって評価するか考えていかなきゃいけない。現場も行政もなんですけれど、教育委員会さんと一緒にやっていくと思うんですが。

　その、どういうふうにやるかの過程で、社会教育委員の会が、その方法はいいですねとかいうことも見ていけると思うし、やった結果、中間報告でこういうふうに評価をそれぞれしました、全体でやりましたというところでももちろん、それが十分かどうかというのも見ていけると思うし、実際に何をどういうふうに進めるかという段階に、社会教育委員の会の役割も任せてというか、点検していくという意味では、その都度何かやることがでてくるのかなという気がするので、現段階ではこの程度にしておいていいのかなと思いました。

倉持議長　ありがとうございます。

　そのほか、この辺りはいかがでしょうか。

石居委員　石居です。先ほど砂押委員がおっしゃった最後の点と関わると思うんですけど、ＰＤＣＡという言葉を入れるかどうかはともかくとして、ちょっと（２）で気になったのは、前からずっと読んでくると、評価は評価のためにするんじ

ゃなくて、その評価をどう生かすかが大事なんだということは、流れで何となく分かる気がするんですが、特に（２）の１つ目のポツを見ても、評価があって、評価の積み重ねが次の評価で、その点検・確認をするという話になっていて、評価の先に何があるのかということへの意識づけが、ちょっと文章として弱いかなと思ったんですね。

なので、ちょっとしつこいようですけれど、やっぱり評価をどう生かすのか、それをまた評価することを積み上げていくんだという説明の仕方があったほうが、いいかなと思いました。それは、この１つ目のポツの中で言うのがいいのか、もう一つは（２）の４項目の並べる順番が、今のところ１つ目でサイクルの話をして、２つ目で評価の種類の話、３つ目で評価の主体の話、最後に公表となっているんですけれど、もしかすると３つ目の主体の話が、冒頭に来てもいいのかなと。その主体の話をする中で、評価というのは評価のためにするんじゃないんだということが、そこに入ってもいいのかなと思いました。

もう一つは、単純に表現の話で、４つ目のポツの最後だけ、「してほしい」という要望調になっていて、全体を見てもほかは大体断定になっているので、ここは調子を合わせてもいいかなと思いました。

以上です。

倉持議長　何ですかね、そうすると。ずっと考えていると、語尾のバリエーションがなくなってくるので。「公表していることを情報発信すること」というのはちょっときつい感じがする……。「すること」でいいですか。

そうすると、今の石居委員の提案だと、３つ目、「事業評価の基本は行政による自己評価」という話を（２）の一番最初に持っていって。生涯学習振興・推進計画を実行し、その実行を点検評価し、改善し、次の計画につなげていくという、一言でいうとＰＤＣＡなんでしょうけど、なるべく横文字、片仮名文字をやめようという話が前回あったこともあるので、中身でいうとそういうことを入れるとしたら……。

石居委員　すみません。じゃあ、もう一つだけ。（２）じゃなくて（１）に戻っちゃうんですけど、（１）で結構近い話はされていて、（１）の１つ目のポツが、改善するための手段やプロセスだということは言っているので、その話は出てきているんですけど、（１）って、その話が最終的に評価の対象の話でまとめられているんですよね。それから５つ目のポツも、それがどう活用されるのかという話に振っているんですけど、でもそれは最後フィードバックの話に戻っているので、近いところまで行きながら、話の主題が違うところへ、最後は落ちている感じがするので、もしかすると（１）のほうできちんと出して、（２）は今のままにするという手もあるかなと思いました。

すみません。余計なことを言ったかも。

倉持議長　かなり重複しちゃう感じがするんですけど、入れるとしたら、（１）の２つ目、評価の目的のところですかね。計画の話ももうここに出てきているので。計画し、実行し、点検評価し、それを生かしていくという、サイクルというか、が分かるように、明示したほうがいいんじゃないかということですよね、さっきの砂押委員や石居委員の御意見は。

（１）が全体的な考え方なので、そちらに入っていたほうが確かに適切かなという感じがしますね。

富田委員　ＰＤＣＡサイクルのことって、内容的には２ページの大きな２番、中間評価・最終評価の方法についての（１）、評価の時期についての中間報告のところ

で言っていることで、いいんですよね。

倉持議長　結局、いろんなところに出てくるんですよ。中身としてはほとんど、何で評価するかとか、いつ評価するかとか、どうやって評価するか、どう生かすか、どう公表するかなので、いろいろなところに出てきて、今おっしゃったところにも出てきているということかなと思いますね。

じゃあ、最後までやってから、入れるか入れないか、どこに入れるかをもう一回検討しましょうか。端的に表す構造みたいなところを入れたほうがいいんじゃないかという、お二人の委員からの御意見だったので、それを最後にもう一回検討したいと思います。ありがとうございます。

そのほかに、１の（１）、（２）の辺りで御意見はありますでしょうか。

では、先に（３）単年度評価について、検討していきたいと思いますので御覧ください。これは前回、後ろのほうにあったのを前に持ってきた部分です。中長期的に評価するためには、単年度評価が重要な資源となるということで、現状で行われている進捗状況調査、この社会教育委員の会でも報告をいただきましたけれども、それをより効果的で充実したものにするためにということで、項目を５つ立てています。

１つ目、評価内容に「目標」を明示する。２つ目、評価における新たな項目として「次年度の実施方針」を加える。３つ目、項目の記載にあたっては、実施回数や参加者数などの定量的な実績だけではなく、定性的な評価、すなわち担当課としての振り返りや職員による観察、市民との対話、市民・利用者からの声などの記述をさらに充実する。４つ目、担当課評価（Ａ～Ｄの４段階で評価）の判断基準については、「前年度並みの成果があったかどうか」、この「だけ」は、入れたほうがいいか、入れなくていいか、私が最後まで悩んだので、後で意見を下さい。「前年度並みの成果があったかどうかではなく」と、「あったかどうかだけではなく」では、意味が大分違うので。続き、生涯学習振興・推進計画の基本目標や重点施策にのっとって行う。５つ目、「国立市生涯学習振興・推進計画に記載した事業の進捗状況調査」や「国立市教育委員会活動の点検・評価報告書」の評価結果を市民や利用者に周知する。

ということで、５項目を立てています。

この１の（３）について、御意見よろしくお願いいたします。

お願いします。江角委員。

江角委員　３つ目のポツで、定量的な実績と定性的な評価というふうにあるんですけれども、次の大きな３番で、定性・定量の両面からの評価についてと、それぞれの評価に触れているので、ここでは省かれたほうがいいんじゃないかと思うんです。「項目の記載にあたっては、実施回数や参加者数などの実績だけではなく、担当課としての振り返りや職員による観察」と省いてしまって。

で、文末ですけれど、「充実する」ではなく、「させる」ではないかなと思います。

倉持議長　ありがとうございます。途中の定性的な云々のところは省いて、中身の表現のところですね。「実施回数や参加者数などの実績だけではなく、担当課としての振り返りや職員による」云々で、最後「充実させる」と。ありがとうございます。

これは確かに、実は後から足したので、なくてもいいかなと。行ったり来たり、ずっと見ていると、何となくリンクさせたくなってしまうというところで。

ほかにはいかがでしょうか。

例えばさっきの４つ目、「だけ」は、あったほうがいいか、ないほうがいいか。

石居委員、お願いします。

石居委員　今おっしゃったところ、僕は「だけ」があったほうがいいかなという気がしました。そんなに深い理由は説明しにくいんですけれど。「だけ」がないと、これそのものの完全否定になってしまうので、やっぱりあり得る可能性は、残しておいたほうがいいかなというふうに思いました。

あとついでに、１項目目なんですが、これだけだと、ちょっと読み手には伝わりにくいかなと。僕もぱっと見たとき、受け取り方が二様あって。評価内容に目標を明示するというのは、そもそも今年度の目標が何だったのかを明示した上で評価せよと言っているのか、この評価内容を踏まえた上で、次の目標が何なのかを明示せよと言っているのか、そこが分かりにくいかなと思うので、その辺を、もうちょっと言葉を足したほうがいいのかなと思いました。

倉持議長　なるほど。次の２つ目、「次年度の実施方針」と書いてあるから、例えば「評価内容に今年度の目標を」とか足して上げると、分かりやすいということですね。

石居委員　という感じがします。はい。

倉持議長　ありがとうございます。

富田委員　富田です。私も、この目標を明示するってどの目標なのか、大きい目標なのか。現行の進捗状況の報告だと、事業ごとに書いているというか、重点施策、事業名、目的、内容で、実績の振り返りとかというふうになっているので、目標といったとき、一つの例だと、ライフステージに応じた学習機会の充実という重点施策で、事業名が青少年キャンプ事業というのがあるんですが、で、次に目的、内容で、ほとんど事業内容が書いてあるんですけれども。目標と目的という言葉の違いもあるけれども、目標というのが、この青少年キャンプ事業では何を達成するみたいなのを入れるということなのか。

倉持議長　多分、最初に御意見いただいたときはそういう意図だったんじゃないかなと思います。こういう事業をやるに当たって、それが量的な目標だったら、受講者何十人以上とか、そういう話になるんだと思いますけど、一定程度事業ごとに、今年はどこまでやるかみたいなことを書いてもらったほうがいいんじゃないかという御意見だったのが、ここに反映されていたのかなと思うんですが。

これは全部単年度の、事業ごとの進捗状況調査について書いた文章なので、１つの進捗報告ごとにという意味での意見だと思います。というつもりで書いています。

富田委員　資料として頂いた前年度の進捗状況調査の、これですから、狭いこの段の中に、項目が、「目標」というのと「次年度の実施方針」、その項目はまた入るということですよね。

倉持議長　まあ、意図としてはそうだと思います。

富田委員　恐らく、この形式を変えないとしたら。

倉持議長　その形式かどうかも私たちの分かるところではありませんけれども。そういう多様な観点から、進捗状況調査をしたほうがいいんじゃないかという、た

しか単年度の評価に対しての御意見だったので、それが今こういう状態でまとまっていると。もちろん、今日の議論でそれを入れる必要はないというんだったら、ここは取り下げればいいだけなんですけれど。ここまでの議論では、単年度の事業できちっと積上げしていくというところで、項目をもう少し増やしたほうがいいんじゃないかという御意見があったように記憶しています。

富田委員　はい。だんだんそういう欄が入って、何が書かれるかというのはとても面白いとは思いますので、本当に振興する計画だから、目標を掲げて、じゃあ、次年度どうするかというのが入るのはいいと思いますが。そうすると、かなり大変ですね、進捗状況を総括するのが。

倉持議長　大変ですね。

富田委員　すばらしい報告になっていくと思います。

倉持議長　それは、あくまで意見として私たちは出すので、そのとおりになるかどうかは分かりませんけど、そういう項目があったほうがいいんじゃないかという、意見ですね。

　そのほかはいかがでしょうか。

　さっきの「だけ」問題は、石居委員からは「だけ」があったほうがいいんじゃないかという御意見がありましたが、ほかの委員の皆さんはいかがですか。

根岸委員　あったほうがいいでしょうね。

倉持議長　じゃあ、括弧になっていますけど、括弧を取って「「前年度並みの成果があったかどうか」だけではなく」ということにしたいと思います。

富田委員　すみません、ちょっと。この「前年度並み」という意味が、そういう表現をするというのがよく分からないんですが。これが進捗状況なわけですよね。そうすると進捗していないという意味になるんですかね。「前年度並み」っていうのは。

倉持議長　「前年度並み」というのをどう評価するのかという、自己評価なので、横ばいとか、前年度同等の成果があったとか、ポジティブな意味かネガティブな意味かは計り知れないんですけれども。

　ただ、この会議では、前年度並みというと、何というか、発展も見直しもない、前年度と比べるだけの評価軸でいいのか、計画があるのに計画に立ち戻った視点というのがないのは問題なんじゃないかということで、そこだけを基準にするんじゃないという議論だったと思うんですね、たしか。

　前年度から維持したというふうに評価してもいいんだけど、もう一回、チェックする際に計画と比べて見てほしいということを言っておきたいというのが今回の意見の趣旨だったように思うので。「前年度並み」の意味みたいなところまでは深掘りしていません。

富田委員　そういうことだったら、「だけ」が入らないとまずいですよね。

倉持議長　そうですね。「だけ」を取ると、計画をさらに重視してほしいという意見にはなるんですよ。前年度並みかどうかということじゃなくて、計画にのっとった評価にしてくださいという言い方にするか、前年度かどうかという観点を入

れてもいいけど、計画をちゃんと考えてくださいという言い方にするかどうかが、「だけ」があるか、ないかの違いなんですね。意外とニュアンスが違う。
　いずれにしても計画は重視してほしいという意味を伝えたいということだと思うんですけど。
　どうぞ、丹間委員。

丹間委員　今、かぎ括弧の中で言っている「前年度並みの成果があったかどうか」というのは、これまでの評価の在り方について、やや批判的に見ていたのでこのように書いています。そういうやり方をずっと続けていていいのかという意味合いで、これを入れています。ですので、そうはいっても、これまでのやり方もいい面があった、悪い面だけじゃないというのであれば、「だけ」を入れていただいて、そうじゃなくて、やっぱりそこは全面的に改めていかないと、今後、社会教育の計画立案に当たって支障があるというんであれば、「だけ」も取ってしまってということになるわけですけれども。
　前年度の比較ということも重要な観点、特にＰＤＣＡというお話がさっきありましたけれど、ＰＤＣＡサイクルという意味では、経年度の比較をするという上でも「だけ」を入れて、年度間の比較ということも視点に置いていくということで、よろしいんじゃないかなと考えます。

倉持議長　ありがとうございます。意外と、「だけ」を入れるか入れないかで、メッセージ性が違うということが明らかになってきましたが。
　では、現時点では「だけ」を残した形で。改めて３月の時に、文字で見たときどんな感じかというのも御確認いただきますけれども、今日の段階では「だけ」を残しておいて、「だけではなく」にしておきたいと思います。ありがとうございます。
　それでは、次の大きな２番に行ってもよろしいですか。
　２の（１）がやや悩ましいところでして、評価の時期、タイミングについて何ですけれども。前回のこの会議で、結論が出なかったところです。何年目に中間評価、最終評価するかというところですね。前回結論が出なかったので、中間評価、最終評価ごとに２通り書いてみました。何でその時期がいいかという理由もちょっとつけてみました。このまま、この形でいくか、もしこの会議で結論を絞ることができれば、どちらかを消せばいいという話をしているので、もう一回確認しますね。
　組合せではちょっと複雑になっちゃったので、中間、最終というふうに分けています。「中間評価の時期（タイミング）については、次のような案が考えられる」として、４年目に行う案。「３年間の単年度評価の実績を踏まえて４年目に中間評価を行うことで、課題や問題点を早期に見出し、必要に応じて翌年度から対応や変更を行えるようにする」。２つ目は中間評価を５年目に行う案。これは計画の中間地点だから、「中間的な達成度を把握する」ということで、一応、理由をちょっと変えて書いてみたという形です。
　２つ目のポツは最終評価の時期。最終評価を９年目に行うということで、次の１０年の計画を立案する際に活用するために、１０年ぴったりじゃなくて９年目にやる。２つ目は、最終評価を１０年目に行う。「１０年間の総合的な成果と課題を分析する」という観点で、両論併記の形にしています。
　ここでいくか、やっぱりどちらかにちゃんと絞ったほうがいいかということを、今日は議論したいと思います。
　ここは短いので、まとめて（２）まで行きます。（２）は評価の対象なんですけれども、「中間評価・最終評価は、単年度事業評価を踏まえて、生涯学習推進・振興計画の基本目標や重点施策に即して行うことを基本とする」というふ

うに、まず明記しました。それ以外の視点もあるけど、とにかくまず基本は、計画に則した評価ということなんだと示した。
　その上で、「加えて」という形にしたんですけれど、「次に掲げる観点を例に、多角的な観点で中・長期の評価の対象を選定することを検討する」、ちょっと弱いニュアンスにしているんですけど。やってもやらなくてもいいよという感じで。ただ、こういう観点がありますよということで、「長期継続実施している事業／新規かつ注目される事業／見直しや改善が求められる事業／所管課ごとに選定した事業など」ということで、これまで出てきた評価の枠組みというか、観点を羅列する形で、こういうのを加えてもいいですよ、いいんじゃないですかみたいな形で書き分けてみました。
　では、２の（１）評価の時期、（２）評価の対象について、御意見をよろしくお願いいたします。
　苫米地委員、お願いします。

苫米地委員　事前にもらったこの資料を読んだときには、ふわりとした表現で作成するのだと思っていました。今回のように、どちらかを選ぶことが可能であるという趣旨なら、絞ったほうがいいと思います。
　そこで、私は、中間の時期は置いといて、最終は９年目に行う案がいいと思います。その理由で９年目に行うことで、次の推進計画に生かすことができるからです。

倉持議長　ありがとうございます。もちろん、苫米地委員がおっしゃってくださったように絞ったほうが、はっきり意見を提示できる。その代わり、前回結構どっちもいいねという案が、それぞれの委員さんの御意見が分かれたので、合意形成できれば絞ったほうがいいですけど、できなければ無理にまとめることもないかと思い、こういった書き方になっています。
　最終評価からのほうが議論しやすいですかね。中間が意外と、まだまだどっちがいいか難しい感じでしたけれども。
　最終評価を９年目にやるか、１０年目にやるか。次年度の計画に生かすことをより重視するなら９年目、１０年間の計画の成果や課題ということをきっちり出そうというんだったら１０年目。極端に言うと、そういうことかなと思うんですけれども。今、苫米地委員から、９年目がいいんじゃないかという御意見を上げていただいたんですけれども。
　富田委員、どうぞ。

富田委員　砂押さんにＰＤＣＡの観点からもう一度、前もおっしゃってくださったと思うんですが、具体的にどういうふうに、見直しがなされなければＰＤＣＡにならない、見直してそれが実行されるということを入れ込んだ年の設定にすると、中間の場合はできますよね。例えば学習情報があまりみんなに行き渡っていないわと、そういう評価が中間で出たら、じゃあ、どうやってもっとやるかというのはできますよね。
　最終で、これができていなかったということが出てきたら、次の年に、じゃあ、こうしましょうというのを出す、そこまでがＰＤＣＡのやるべきことなのか、あるいはＰＤＣＡということじゃなくても、そのできていなかったことを評価として出すというところまででいいのか。
　そういうあたりでもう少し、お話を聞けたらなと思うんですが。

砂押委員　例えば中間評価で、３年目で評価結果が出ました、その結果を見た上で、多分３年目のその事業については、翌年度の計画をどうするか、大体の方針を

書けという話なので、じゃあ、翌年度どうしますかというのも書いていると思うのです。だから、ある程度その評価を出したとき、翌年度どうしようかというのは一緒に考えていると思うんですよね。評価と計画というのは、プラン・ドゥ・チェック、アクション、アクションというのは手を打つということだから、評価をした段階でこれじゃ駄目だなということが分かると、じゃあ、どう手を打とうというのをみんな考えながら、多分作業をやっているんじゃないかと。実際、どうするかを書かなきゃいけない形式になっているので。

　そうすると、じゃあ、中間評価だけどこかで集めて、４年目に１年間かけて、その次どうやっていくのだということを議論しているのでは時間がなくなるのではないかと思います。裏で、事業はどんどん先に進んでいるわけですから。

倉持議長　ここで言うＰＤＣＡって、私の理解では２つのサイクルが回っているんですよ。事業ごとのＰＤＣＡサイクルというのと、生涯学習の計画の大きな枠組みでのＰＤＣＡサイクルというのがあるんですね。事業ごとには事業ごとの目標があったり、目的があったり、進捗評価で確認していくものがあって、それはもちろん単年度で評価して、来年度に生かすというのは進行していくんですけど、中間評価とか最終評価は、計画で掲げている基本方針とか重点施策という基軸で、それがどれぐらい進捗しているか、達成されているか、課題があるかということを見ていく。事業横断型なんだと思うんですね。ある程度複数の事業をまとめた上で、重点施策や基本軸が達成されているかということを判断していく。

砂押委員　はい。それで、私もその理解でいいと思います。

倉持議長　そうなったときに、中間評価も、あるいは最終評価の資源となるのは、単年度評価の各事業の集積ではあるんだけれども、それを目標とか重点施策に沿って、情報を集約して、整理して、次の計画に生かす。その動きをつくっていく上で、どのタイミングがいいのかという議論を、今しているということなんですね。

　なので、３年だとすごく短い。前回は中間評価は１回でいいんじゃないかという議論のところまでは落ち着いたので、４年目か５年目というところまでは一旦落ち着いていたかと思いますけれど。

砂押委員　４年目、５年目でもいいと思うんですけど、結局は重点施策に対して手を打つということでいいわけですよね。各年、事業をやっていて、各年度のそれぞれの事業では、来年度はどうしようという個別の小さなＰＤＣＡが回っているとして、そのＰＤＣＡの大きな積み上げとして、その全体として見たときに、その上にある中目標というか、重点施策に対して、この小目標の積み上げで中目標が出来上がっているかというところを、どこかのタイミングで見るということでいいわけですよね。

　ただ、その中目標を見るときのタイミングというのが、４年目なら４年目でいいんですけど、１年間かけて中目標をいじっているということだと、ちょっと時間をかけ過ぎで、私は４年目の単年度の評価ができると同時に、つまり４年目の単年度評価をやる作業と同時に、重点施策まで一緒に見直す作業を進めるべきではないかと。同じ時期にやるべきではないかと。つまり単年度の評価もしながら、４年間の評価も一緒にやる。そうやらないと、全部が終わってから次の重点施策を考えますというのだと、ちょっと遅いし、一緒にやったほうが合理的じゃないかなという感じが、私はします。４年目の単年度も評価するんですよ、評価しながらも、じゃあ、この４年間はどうだったんだろうとい

うのを一緒に見て、中間的に評価しちゃって、そこでＰＤＣＡを回すということがあってもいいのかなと。そうじゃないと、何かずれずれというか、アクションが遅れていくような気がするんですね。

倉持議長　分かりました。今の砂押委員の意見は、私が２ページ目に書いた１つ目を、例えば４年目に行う案で、「３年間の単年度評価の実績を踏まえて」という、そこを多分削除すればいい話かなと思うんですけれど。「４年目に中間評価を行うことで」というふうにすれば、４年目の事業をやりながら、どうやるかというところについては、さっきも言ったように行政がやる評価なので、それができるようにしてもらえばいいということだと思うんですけど、今、私たちがやれることとしてはタイミングを示すことぐらいなので。その前に縛っていた３年間の単年度評価の実績というところをなくしてしまえば、４年目をやりながら、砂押委員がおっしゃってくださったように中間評価を同時並行的にやるという、少し中身を持たせられるという形になると思うので。

今、おっしゃっていただいたことは確かに、できるのであればそうしたほうがいいなと思うんですけど、できるか、できないかはちょっと、私たちが指示すべきことでもないような気がするので。何年度分の実績を踏まえてという部分を削るという問題かなと思いました。

そうだとして、じゃあ、４年目なのか、５年目なのかというところはまだ宿題として残るところではありますけれど。最終評価は９年目にやるか、１０年目にやるか。

どうぞ、佐々木委員。

佐々木委員　佐々木です。今おっしゃっていた評価のタイミングですけれど、評価にどのぐらい時間がかかるのかということに対して、何の事業に対する評価なのかということとは決まっていないので、１年かかるような評価なのか、それともすぐ出せるのかということになると、行政がやっているものって、先ほどのキャンプの案が例でありましたけれど、せいぜいやっても春とか、その辺に一度キャンプをやって、秋にもう一度やって、２度やれたらいいところで、毎月やれるわけはないと思うんですね。そうすると、そのイベントができた時点で、アンケートか何かが集まればその時点で年度評価ができますよね。で、ずっと比べたら、前回より増えたか、減ったかとか、リピートは必ずおっしゃるけど、いろいろなデータをそろえて、これが増減したことによってやったことが喜ばれているとか、喜ばれていないとか、いろいろ反省ができて、次の手はどうしようかというのはそのまま出てくると思うんですけど。

丸ごと１年かけて、評価するだけに何かするということはないと思うので、今、書かれているようにそういう面では事業ごとに対応できるように、曖昧なタイミングにしておいていいと思いますけど。そういう意味で。

倉持議長　ありがとうございます。単発のものもあれば、継続してやるような事業もあるので、それぞれ事業に応じてやっていただくしかないかなと思っているんですけれど。

しかし、この中間、最終のところは、少し大きな目線で見たときの評価の流れを示すところなので、今おっしゃっていただいたように、単年度評価に関してはある程度ゆとりを持たせつつ、計画とのバランスでいうとどういうタイミングがいいかというところですね。

丹間委員、どうぞ。

丹間委員　確認なんですけれども、単年度評価ではなくて中間評価と最終評価につい

ても、やはり基本は行政による自己評価というふうに私は認識していたんですけれど、それは間違いないでしょうか。
　今のお話ですと、社会教育委員の会があたかも中間評価、最終評価を行うというような議論になっているように聞こえたんですが。あくまでも中間評価も最終評価も、社会教育委員の会ではなくて、行政が自己評価を行うということでよろしいんですよね。

倉持議長　はい。１番でそういうふうに書いたとおりです。

佐々木委員　僕もそれについて１点よろしいですか。
　前回お話しした、近隣のところがどんなことを、どんな評価しているのか、調べたらどうかというような意見を言いましたとき、丹間さんが、この国立は国立独自のものがあるから、それにふさわしい評価方法を考えたほうがいいよとおっしゃったんですけれど。そうすると、そうなればなるほど、独自性があればあるほど、ほかからの評価がないから、相対評価は、国立市自身の相対評価になりますよね。一昨年とか、昨年とか、もっと前とか、他のところに事例がない以上は、それでよくなったか、悪くなかったかというのは相対評価でしかないので、今やっていることは１００点だとか、そういう点はつけられないわけですね。前よりもいいか悪いか、よくなかったか、しかないので。どうしてもそういう評価になると思いますよね。絶対評価はできませんから。そういうことになると思います。

丹間委員　以前、この会でも行政の評価の報告を受けたことがあるんですけれども、先ほども述べたように、前年度並みでしたというような報告にとどまっていて、その事業に対して我々が何か意見を述べるということができない状況にあったわけです。
　その事業がうまくいっているのかどうか、それをある時点で判断して中止するとか、別の事業に差し替えるとか、あるいはうまくいく方法があるのであれば拡充するとか、縮小するとか。何かそういう判断をどこかの時点でしなきゃいけないはずなんですけど、そういうこともなく前年度並みで１０年間続いてしまうというのはよくないかなと考えています。
　そういう意味ではやはり中間評価のときに、単に経年的な変化を追うだけではなくて、その時点で事業の継続あるいは中止、拡充あるいは縮小みたいなことを一定程度、行政のほうで自己評価で方向性を判断していただくようにするとか、そういったことも必要なのではないかと。重点施策の修正ということが中間評価の時点でできるかどうかは別として、重点施策が修正されないとしても、重点施策とその事業がちゃんとマッチしているかどうか、重点施策を実現するための事業になっているかどうかという点検を、やっぱり３年ないし４年やってみて、４年目あるいは５年目に改善を行うということは、必要なのではないかと考えているところです。
　具体的には２ページ、２の（１）の４行目、「対応や変更」とは具体的に何を指すのか、あるいは７行目、「達成度を把握する」ということも含めて、ここをもう少し具体的な文言を書くかどうかということになるかもしれません。

佐々木委員　すみません。戻っていいですか。

倉持議長　はい、どうぞ、佐々木委員。

佐々木委員　我々、一般的な社会の人は、お金と結果と成果の世界にいるから、必ず

プラス思考で、たとえ１％でも昨年度よりよくならないと、悪いような判断になってしまうんですけど、オブザーバーの方がいらっしゃるのに、目標って決めちゃうと、余計なことしてくれるなだとかですね、これでいいじゃないかって、苦情が来ちゃうことがあるわけですね。

だから、前年と同等であったというのも一つの大きい評価であって、それを増やさなきゃいかんという、絶対前よりよくしなきゃいかんという、その「いい」というのは何をもっていいかというのは非常に難しいところがあって。特に生涯学習というのは成果評価しちゃいかんわけですね。どんな勉強しようが、どんな学習しようが、それは本人が楽しんでいればいいわけであって。

もっとこういう勉強をしなさい、もっとこんなふうな知識を得なさいだとかいうことは一切できない以上は、前年と同じであっても、まあ、どこかと比べるということができるかどうかですけれど、昨年同様であっても成果は成果として、逆に言ったら大幅に減ってひどい状況になっていなければ、それなりに、例えば今年みたいにコロナが起きたとか、我々の世の中でも、今は量子コンピュータみたいなとんでもないものができちゃったらどうなるかとか、社会情勢が変わったとき、それに含まれないものが起こることによる、減ったの、増えたのということは、全く参考にならないことが起こるので。コロナなんか特にそうですよね。

だから前年同様というのも、目標というのをあまり縛り過ぎて、それが必ずじわじわ上がってこなきゃいかんという形に束縛しないほうがいいように思います。という意見です。

倉持議長　ありがとうございます。

残り時間が半分になってきたので。次の本会議がまた２週間後ぐらいにあるので、ちょっとこの辺りは直してきますけれども、今の意見を踏まえると、原則、中間評価というのは、達成度を確認するというよりは、事業の重点施策が十分に実現しているかどうかということを確認した上で、対応や変更が行えるようにする、その事業を拡充したり、継続したり、見直したりするかという方向づけができるにするということでもあるし、１番のほうにも出てきているんですけど、その方向性について、社会教育委員の会が意見を述べるということも明記したほうがいいのかなと思ったので、評価そのものをどうするのではなく、方向性に意見を述べるということかなと思ったので、それも追記して書き直してこようと思うんですけど。

もう一回、ここだけは確認したいんですけど、中間評価を４年目にするか、５年目にするかということについて、はっきり示すか、今の１つ目、２つ目となっているのはやめて、「４年目ないし５年目」というふうに書くか、そこが最後、悩むので。

どうぞ、苫米地委員。

苫米地委員　今、ここで悩んでいることを、４年目に近づいてきたときに、また悩んでもらうのも、申し訳ないので、４年目としてもたらどうでしょうか。

倉持議長　さっき苫米地委員がおっしゃったように、９年目に最終評価をするんだったら、やっぱり４年目ぐらいが適切かなという感じもするので、お尻のほうとも関わってくるんですけど。

次に生かす、ここまで議論してきた意見交換でいうと、評価によってその事業そのものにすぐ生かすのもそうだけど、次の計画にも生かしていこうというその観点が、やっぱり委員の皆さんに強いような気がするので、そう思うと、最終評価は９年目で、中間評価は５年だと近いので４年目ぐらいが、タイミン

グとしてはいいのかなと、だんだん私も思うようになってきたんですけど。いかがでしょうか。

苫米地委員　賛成です。

砂押委員　私も早いほうがいいと思います。

根岸委員　最終評価が９年目、１０年目というのは、どちらがいいというのはないように思うんですが、中間評価だけは早いほうがいいのかなと思います。
　と思いますけれど、そこまで本当に言うべきなのか。先ほど言ったように、四、五年でいいんじゃないかという気も。

倉持議長　そうなんですよね。私たちはそういう意見を出しておいて、決めるのは行政でも、いいといえばいいんです。

苫米地委員　行政が決めるなら。

倉持議長　行政がより適切なほうを決めておいてくれれば、私たちとしては４年目か５年目という言い方もできるんですけど、４年でとバシッと言っておくというのもありなので。この辺が悩むところですね。

佐々木委員　今おっしゃったみたいに、ちょうど今、東北の大震災から１０年ですよね。あっという間の１０年ですよね。それから、先ほどもあったようにとんでもないコロナとか、その前にはＳＡＲＳだとか、社会変動がどんどん来るから、確かに４年目とか、真ん中よりちょっと前ぐらいで一度線を引いておいて、あとはお任せしたほうがいいんじゃないかと。我々が決めたところで、多分これから先の世の中、どうなるか分からんわけですから、その影響で一つの市の施策を評価してプラス、マイナスとかいうよりも、反省するチャンスがちょっと前にあったらいいんじゃないかと思います。

倉持議長　ありがとうございます。
　じゃあ、この部分はまた次回に議題として、また次回の会議の前に見ていただければと思います。
　先に行きたいと思います。最後まで終えておきたいと思うので。
　ちなみに、今、２の（２）についてはあまり意見交換していないんですけれども。何か御意見はありますか。
　じゃあ、またあれば言ってください。
　３番に行きます。定性・定量の両面からの評価についてということで、これは大きく２つに、（１）定性的な評価と、（２）定量的な評価の観点に分けました。
　定性的な評価とか定量的な評価、言葉が分かりづらいという御意見がありましたので、最初のポツに入る前に、定性的な評価とはこういうものだ、定量的な評価とはこういうものだと、ごく簡単ですけれども説明というか、こういうことなんじゃないですかという文章を入れています。
　定性のほうはポツが３つ、定量は２つあります。
　（１）定性的な評価、１つ目のポツは、市民・利用者の反応や声に関わる定性的な評価の説明。２つ目は、職員による定性的な評価についての説明。３つ目は双方向です。市民、利用者、職員による双方向の意見交換の定性的評価ということで。ただ、実際にどんな方式かとか、何とかフォーラムとかそういう

固有名詞は避けて、「双方向で事業の振り返りを行うなど、様々な方法での実施が考えられる」という表現に抑えて書いてあります。
（２）定量的な評価は２つ。１つ目は同じように、市民・利用者の反応や声ということで、アンケートを工夫しなさいということが幾つかの観点から書いてあります。２つ目は職員による定量的評価。ここに目標とか指標という話が、前に出てきたことと関わるんですけれど、適切に目標や指標が設定できるように、職員さんのほうで頑張ってくださいというようなことが書いてあります。
こういう形で少し、定性的評価、定量的評価がそれぞれ呼応するような形で整理してみましたが、いかがでしょうか。
富田委員、どうぞ。

富田委員　（１）の１つ目のポツで、アンケートについてなんですが、だんだんだんだん分からなくなってきて。というか、３行目の「アンケートなどの目的は回答そのものの評価ではなく」という意味が、なかなか分かりにくくて。このアンケートというのは、一つ、参加者が何らかの講座に行ったときのアンケートというのがありますよね。それから、この計画に対して進んでいるか、なっているかということへのアンケートというのも考えられますよね。それが、何かここの表現ではどちらなのか。言い分けているのかな、どうなのかなと。

倉持議長　この文章は、最初に事業の参加者へというふうに書いてあるので、基本、事業に関するアンケートとか振り返りのコメントという位置づけで書いたつもりです。「アンケートなどの目的は回答そのものの評価ではなく」というのは、前回の御意見の中で、市民を評価するわけではないというのは、この文章の最初に書いてあるわけですけれど、回答そのものを講座の……。うまく伝わらないですね。どう表現すれば。
回答の中身を評価するんじゃなくて、そういう回答が出てくる行政の学習環境の整備とか、情報提供とかのほうを評価するための資源だということを、回答する人にも分かるようにちゃんとしてください。つまり、あなたを評価するためにアンケートに回答してもらうんじゃないですよ、こちら、生涯学習を整備する側の評価のためにアンケートをいただくんですよということをちゃんと示しましょうねということを言ったつもりなんですけど、日本語がいまいちだったら、後で日本語チェックが得意な苫米地さんとか砂押さんとかに直していただきたいです。意図はそうでした。

富田委員　はい。分かりました。参加者や市民は、具体的な事業についてのアンケートを答えると。それを基に、事業を実施する行政は、その計画に沿って考えてできているかどうかを考えるんだよということですね。

倉持議長　そうです。ありがとうございます。
で、特に（１）のほうは、記述式だったり、とにかく質的な評価のほうなので、満足度が１、２、３とかでないほうの評価のことを、前段では言いたかったので、記述式とか、振り返りのコメントという言い方にしています。
ほかにはいかがでしょうか。
ちなみに４ページの「おわりに」は、最後に勝手に加えたところがちょっとありまして。ここまでいろいろまとめてきてみたら、「おわりに」をつけたくなってしまって。何をつけたくなってしまったかというと、やっぱり適切な事業評価方法について、一回ここで意見は出すけれども、計画も初めてつくったものですし、評価も初めて国立市としては取り組むので、どういうことが適切な事業評価方法なのかということを、全て最初に結論づけるのは難しいなと思っ

たんですね。なので、今後も継続的に適切な事業評価方法について検証や研究をしていく必要があると言うことによって、それ自体が生涯学習的な観点で、決め切られたものではなく、評価の在り方について、きちんと続けて検証していきましょうよという姿勢を表したほうが、私としては納得感があったので、そういうのをちょっと足したというのと。

もう一つは、何か中途半端な書き方をしているんですけど、特に後半、定性的とか定量的な評価を書いていたり、ただ基本は行政による自己評価と何度も書いていくうちに、これは職員さんは評価する力がないと大変だぞと思って。でも、前回の意見でもあったんですけど、頑張りなさい、だけじゃなくて、そういう力をつける環境をちゃんと整えるというか、ちゃんと評価できるようにサポートしていくということが必要なんじゃないかなと思って、職員の能力開発、評価のためには能力開発も重要ということで、それを足してしまいました。

勝手に足してしまったので、足していいかということを、ちょっと御意見をいただきたいなと思います。「おわりに」を勝手に足してすみませんということと、どうでしょうかということです。いかがでしょうか。

苫米地委員　いいと思います。文章もいいです。

倉持議長　ありがとうございます。

はい。ありがとうございました。それでは、今日いただいた御意見を踏まえて、次の会議が３月２３日なので、修正案を、また数日前になってしまうかもしれないんですけど、事前に送付させていただいて、次回の会議もスムーズに進行できるようにしたいと思いますので、委員の皆さんにはまた非常に短期間でお目通しいただくことになってしまうと思うんですけれども、御協力をお願いします。

それから、基本はこの本日お出しした資料１－２を修正する形で、まとめていこうと思うんですけれど、今日会議の中で言い切れなかったとか、さっきの語尾とか、言葉がちょっとおかしいとか、完成度を高めるために、お気づきの点がありましたら早めに、さっきも言ったように直したものを事前に皆さんに見ていただいた上で、次回議論をするので、早めに事務局に御連絡いただけますと、修正作業に取り入れたいと思いますので、よろしくお願いします。内容的なことは今日議論したので、表現的な部分で御意見とか、修正とかありましたら、事務局に御連絡を下さい。

御検討いただきまして、ありがとうございます。

それでは、次回の確認を事務局よろしくお願いします。

事務局　事務局でございます。本日はかなり詳細な審議をいただきまして、ありがとうございます。出てくる意見書がかなり重そうなものになってくるのではないかと思っております。

次回の定例会ですが、第２３回になります。３月２３日火曜日、一応日程的には夜７時としておりますけれども、こういった現状もあるので、もしまた委員の皆さんの御都合がよろしければ、本日と同じように６時半からにしたいというところは、事務局から投げかけさせていただきます。場所はこちら、同じ第１・第２会議室で予定しております。

倉持議長　はい。いかがでしょうか。次回の会議も３０分繰り上げて、１８時３０分からでよろしいですか。

（「いいです」の声あり）

倉持議長　ありがとうございます。

この状況がいつまで続くか分からないんですけれども、では次回、３月２３日１８時３０分からこの場所でということで、よろしくお願いします。

それでは、以上をもちまして、社会教育委員の会臨時会を終了したいと思います。皆様、ありがとうございました。

――　了　――